

「内的生活の規律」から生まれる詩を巡って —— 第二次大戦前夜のチェスワフ・ミウオシユの場合 ——

山 本 悠太郎

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 戦争前夜の1938年、詩人チェスワフ・ミウオシユは「純粋な詩」をめぐる論争に巻き込まれる。ある批評家から「純粋な詩」の詩人だと名指しされた彼は、「純粋な詩」には「人間への愛」が欠如しているが、そもそも詩とは困難な世界において誰かの役に立つべきものでなければならぬと反論した。本稿では、論争において彼の理想とした詩が、実際にはどのような特徴を持つものとして創造されたか、論争と同時期に書かれた詩をいくつか取り上げ、考察した。

彼の作品に描かれる地上ではカストロフが予感されており、神の救済も期待できないものとされる。そんな中で地上に生きる他人（人間）と愛で結ばれた「私」（詩人）は、「私たち」のために立ち上がり、詩の言葉で世界を救い出そうと決意している。

ミウオシユが書いた詩は「道徳的あるいは市民的な義務」を果たすものであるといえる。しかしながら、他方で彼はそうした理想の詩を書くというプロセスが展開される。詩人個人の内面世界をこそ重視していた。この点で、戦争前夜に彼が追求した詩とは、正確に言えば「内的生活の規律」から生まれる詩であったと結論付けられるだろう。

キーワード：カストロフ、ポーランド、詩、両大戦間期、純粋な詩

0. 「転換点」としての1936年

両大戦間期、ポーランド詩壇では「純粋な詩」をめぐる論争が幾度にも亘り繰り返されていた。「純粋な詩」が意味するものは論争の時々によって多少の異同があったものの¹⁾、論争で問われていたこととは「（詩は）それ自体が目的であるべきか、それともより高次元の、道徳的あるいは市民的な義務が課せられるべきか」（Ostasz 2017: 6）というジレンマそのものに他ならなかった。それ故「純粋な詩」を論争の焦点から捉え返すならば、それは倫理・道徳的義務から自由で、自律的なもの（芸術のための芸術）を指すと考えられよう。

そして両大戦間期後半に詩人として活躍していたチェスワフ・ミウオシユ（Czesław Miłosz,

1911-2004）も、実のところ論争に巻き込まれた当事者の一人であり、そうしたジレンマと決して無縁ではなかった。この時期を振り返って彼は後年、次のように記している。

多くの詩人たちは塔に閉じこもることに反発し、マルクス主義的な意味で一般に解される革命の側へとその身を投じることもしばしばだったが、そこではなによりもキリスト教以後の救済の探求（……）が見られた。社会運動や独立運動に奉仕する詩は、いわばロマン主義時代に結ばれた民衆との契約を更新したのだった。だが当時から矛盾も存在しており、というのはその詩が（……）広く大衆へ訴えかけるにはあまりに難解だったのである。（……）正直に告白すれば、私は現代詩人の

皮を被ることに居心地の良さを感じなければ、さまざまな「純粋な詩」の変種（……）に懐疑的でもあった。なぜならその詩へのオマージュには偶像崇拜じみたものを見て取っていたからだ。若い頃、私は社会的アンガージュメントへの法外な拠出金を支払ったが、今では塔から逃れるそうした方法が良い結果をもたらさないと知っている²⁾。(Miłosz 1990 : 155)

引用にある「社会的アンガージュメント」とは、たとえば1933年に発表された彼の第一詩集『凝固した時の詩』[*Poemat o czasie zastygłym*]に見られる、詩人自らが個の領域（塔）を捨てて民衆（社会）の中へと入っていき、予感されるカストロフから人々を救う神の遣い（先導者）としての役割を全うしようとした事実を指す³⁾。だが既にしてその詩集にも見て取れたように、ミウオシュにとって個というものは容易に手放しがたいものでもあったから、「アンガージュメント」はそのまま、「自らに嘘をついている」という強烈な強迫観念（法外な拠出金）を伴うこととなる(Miłosz 2003 : 151)。結果として1936年に出版された第二詩集『三つの冬』[*Trzy zimy*]は、詩人自ら認めるように「青年時代のドラマにカタを付け」て、偏に「純粋な詩」への反発から「社会的な詩」を書こうとすることの不毛さ（良い結果をもたらさないこと）を総括するものとなった(Gorczyńska 2002 : 12-13)。

一方には詩の「それ自体が目的である」こと（純粋な詩）への強い否定があり⁴⁾、その対極においてもミウオシュは「社会運動や独立運動に奉仕する詩」を首肯することができない。こうした行き詰まりを乗り越える一つの可能性として、『三つの冬』には、詩作の起点として「私」の深く内省することがやがて「人間」という運命共同体や、「私たち」の生きる「世界」へと開かれてゆくという理想的な詩のあり様が示唆されていた⁵⁾。事実、1936年頃より彼の作品には、抒情詩の主体の内的世界——カストロフの予感や恐怖、諦念——が印象的に描き込まれるとともに、それを「人間」に待ち受ける共通の運命として捉

え直し、「私たち」の一人として受け入れようとする姿勢も見られるようになった。

上記のように、個（私）によって追求されたことがやがて集団（私たち）へ繋げられてゆくというダイナミズムの端緒が見られることから、文学者のKrólak (1989 : 6)の言葉を借りて、1936年とはまさに「詩人の内面における転換点」になったのだと見ることも出来るだろう⁶⁾。だが議論をさらに進めて「転換点」を迎えた後の詩人の足取りをも追うにあたり留意したいのは、当時のミウオシュが、あくまで破局が待ち受ける「人間」の運命を受け止めようとしたに過ぎず、「社会運動や独立運動に奉仕する詩」に見るような、そこからある種の行動（革命）を起こそうとはしていなかったという点である⁷⁾。1936年の時点では仮にもそうした「楽観的」な態度を取り得たとして、いよいよ破局も間近に迫ろうという戦争前夜に、果たして詩人たる彼の態度は何らの変化も被らずにいたのだろうか⁸⁾。

1936年から1939年までのミウオシュの創作活動を考えるにあたり、最初に触れた、1938年にミウオシュが巻き込まれた論争を振り返ることは大いに参考となる。というのも、それが「純粋な詩」をめぐるものであっただけでなく、自身を批判する論客に応答する形で詩人というものの責務や詩のあるべき意義を彼が明確に説くためだ。

以上から本稿では、「転換点」となった1936年からポーランドがドイツに侵攻される1939年までの、いわゆる第二次大戦前夜におけるミウオシュの創作活動を取り上げる。「純粋な詩」も「社会運動や独立運動に奉仕する詩」も首肯できず、カストロフの待ち受ける運命をひとりの「人間」として受け止めようとしていた彼は、その間に自らの詩人としての姿勢をどのように内省し、あるいは変えることと相成ったか。またそこからどのような詩の理想を導き出すに至ったか。

考察の手掛かりとして、本稿ではまず論争のきっかけとなったルドヴィク・フリーデ(Ludwik Fryde, 1912-1942)とミウオシュによる論争の内容を確認する。後でみるように、この論争は一方が「(詩は)それ自体が目的であるべき」と主張する(フリーデ)のに対し、もう一方は「より高

次元の、道徳的あるいは市民的な義務が課せられるべき」と反駁する（ミウォシュ）といった従来の論争構造とそう変わりがなく、しかも論争に参加した人々の応酬はすれ違ったままに終結している。加えて、論争に参加した者が当時すでに述べていたのだが、フリーデおよびミウォシュたちの主張には批判すべき詩も理想とすべき詩も、いずれの例示や引用もなかったことから、書かれていた詩と論考との具体的な「繋がり」は見出しがたいとして、現在にいたるまで文学研究者が取り上げるということは多くなかった⁹⁾。そもそもミウォシュ研究でもこの時期における彼の創作活動を注目するものは多くない中で¹⁰⁾、先に挙げた点からも、論争の意義を問うことが一層重要なことは言を俟たない。

そうして、論争から重要なポイントを確認した後は、やはりミウォシュが当時執筆した詩を数編取り上げ、韻文という観点からも説明を補うことによって、戦争前夜に彼が辿った足取りをより鮮明に浮かび上がらせることが本稿の最終目標である。

1. 「純粋な詩」論争

1.1. 論争の導火線 —— フリーデ「二つの世代」より ——

1938年、著名な文芸批評家であったフリーデは小論「二つの世代」[Dwa pokolenia]を発表する¹¹⁾。彼はフランスの思想家ジャック・マリタン (Jacques Maritain, 1882-1973) の著書『芸術と知恵』[Sztuka i mądrość] を下敷きに、マリタンの「芸術作品そのものはそれ本来の美しさのためだけに作られ、構築され、組み上げられねばならない」¹²⁾ という考えを援用する形で以下のように主張している。

芸術の価値は形体に、artifex [芸術家] が物質へ刻印する形式的観念に存する。芸術家も職人もそのようにして創作するが、芸術家が作り出すのは単に生活に役立つものだけでなく、美的観想にとっての美なるものをも生み出す（実質的にその二つは一体となり得る）。

美とは真理や善と同様に超越的なカテゴリーであり、芸術家によって形成された対象から発せられる精神的な輝きである。(Fryde 1938: 7)

フリーデは別の箇所でも「芸術家の役割とは美しいものを創造することだ」と喝破してみせるが、彼が詩の価値を（表現）形式という「超越的」な美に求めていることは明らかである。こうしたマリタン由来の美学は、特有のメタファーや省略、連想主義といった「新たな詩的統語論」を駆使し、現代人の「精神的物質」を顕現させようとしたアヴァンギャルド詩の蹉跌を超克するという。つまり、アヴァンギャルド詩は従来の「言葉」をいわば破壊しながら、他方で象徴主義のようにして創作者の感情（精神）的等価物を描出するという取り組みに乗り出したが、その困難さ故に挫折してしまった。だがフリーデが擁護する「新しい詩」では、詩人の想像力により新たな意味的・感情的価値を付与された日常の「言葉」が「記号」となって、現実の感情（精神）をあくまで単なる起点として、そこから作品内で自己完結した「純粋たる詩的体験」を構築することが出来るというのだ。そこでは「非人間的にして美的な効果のために、[詩人] 個人の情動は霧消してしまう」こと (Antoniuk 2023: 40) が企図されていたとも言えるだろう。

そうした個の体験が最後には滅却されるような「新しい詩」を創作し得る芸術家として、彼はミウォシュら 1930 年代に活動し始めた世代の詩人を挙げる¹³⁾。そして論考の最後にて、「詩が生から逃げているのではなく、生が詩に背を向けている」と思えるほどに詩人を取り巻く状況が混沌としてゆく中で、フリーデは若い世代に向けてこう激励している。

確かに、若い詩は純粋さを求めるあまり、その素材を限定し、頻繁に地上から離れ、抽象的で幻想的な形式の戯れを繰り返してきた。だがそれは若い詩の咎ではない。(……) 芸術と美の間には絶えず二律背反が存する。芸術家は二つの世界の間で宙吊りとなっている。

一方には魂に美の輝きが映える天が、もう一方には額に汗して「形を与え」、職人的な苦労を通じて理想を実現せねばならない地上がある。そして天と地の間に深淵が覗かれる時——芸術家は芸術を救うため、それを美の方へ一方的に導き、可能な限り非現実化、非肉体化しようとしなければならない——世界からの完全な孤立という苦い代償を払ってでも。(Fryde 1938: 11)

初めに見た「(詩は) それ自体が目的であるべきか、それともより高次元の、道徳的あるいは市民的義務が課せられるべきか」という二律背反のテーゼに触れながら、それでも「新しい詩」は地上でなく天(美)を希求する「純粋な詩」でなくてはならないとフリーデは力説する。こうしてフリーデは、ポーランド・アヴァンギャルド以前の詩を担った「古い世代」を一まとめに批判し、ミウォシュら「若い世代」の「純粋な詩」にこそ希望を見出していたのだった。

フリーデの論考が発表されると、数々の批評家が反応を示した。尤も大半は彼に批判的なものであり、文学者の Antoniuk (2023: 49-58) も指摘するように、彼によるマリタン解釈の浅薄さ、用いられる「形式」や「美」といった概念の曖昧さ、そして上記の瑕疵に印象づけられる「新しい詩」の実現不可能性がしばしば指摘された¹⁴⁾。

確かに、「純粋な詩」が重要なテーマの一つであった当時の詩壇で、フリーデの提言には目新しさがなく、論証においても成功したとは言い難い。したがって上に見た批判のみであれば、この論争はフリーデと批評家たちとの間で収束していったことだろう。だが見落としてはならないのは、「二つの世代」にはさらに別の批判も寄せられていたことだ。文芸批評家のヴィカ(Kazimierz Wyka, 1910-1975)は当時フリーデに向けてこう記している。

ミウォシュ、ザグルスキ、チェホーヴィチ、リムキューヴィチ[にあるの]は「非の打ちどころのない芸術的論理に作品を貫かれた、意外性と幻想的な輝きが印象的な詩的イメー

ジ」だけでなく、同時にペシミズム、精神主義的な純粋さ、終末論、壮大さの感覚といった態度とも切り離せない¹⁵⁾。

先述の通り、フリーデは「新しい詩」を実現する詩人としてミウォシュら「若い世代」を挙げたのだったが、彼らは果たして「純粋な詩」の創作者であるといえるのか。こうした疑義はヴィカのように論争へ乗り出した批評家たちだけでなく、組上に載せられた詩人その当人をも必然的に論争の中へ巻き込んでゆくこととなる。中でもミウォシュは、当時名を挙げていた詩人の一人であったから、この後に彼が発した声明もフリーデに劣らず大きな注目を集めた。

1.2. 詩の「忘れられた意義」の再興

——ミウォシュ「今日の「詩」の嘘」より——

ミウォシュによる論考「今日の「詩」の嘘」[Kłamstwo dzisiejszej „poezji”]¹⁷⁾は1938年7月に発表された。文中にフリーデの名こそ登場しないものの、先の小論で「新しい詩」を創作し得る「若い世代」のうちに含められたことへの反発心は、「私は私自身の名の下に発言するのであり、私以外の誰かを代表するつもりはない」(Miłosz 2003: 233)という最初の一文に現れる。そこから彼はフリーデおよび「純粋な詩」への反論を書き進めている。

純粋な詩というこの不毛な戯れに私はひとり嫌悪感を表明したいのだが、その嫌悪感は、編集部や酒場あたりで互いへのお追従によって掴み取った自らの勝利を誇示する2日間の名声よりも、7時間もタイピングするお嬢さんやレンガを積み上げる職人、道行く新聞配達員へと一層私に親近感と尊敬の念を抱かせる。(……)形式主義的な学派の繊細な道具を備えながら、しかし真実の美すべてに目も耳も利かず、流行の言葉とリズムの組み合わせより他の価値に会おうともはや評価を下せないあなたの称賛者たちを、概念を越えた茫然自失の体にさせてしまう手段であると、

あなたの芸術論は見做されている。この芸術論を非難するには、(……) [詩人が] 地上に降り立ち、数えきれない多くの存在と同等だと感じるだけで十分だ。(Miłosz 2003 : 233-234)

引用中の「あなた」とはまさしく「形式」(言葉とリズムの組み合わせ)のみを詩における美だと宣言したフリーデを指すものと考えられる¹⁸⁾。ミウォシュは論中で「純粋な詩」を批判するが、それは、「純粋な詩」の詩人には「地上へ降りる」こと、つまり「お嬢さん」や「職人」、「新聞配達員」といった「数えきれない多くの存在」(民衆)の一人であると自己を認識する経験が欠如しているためだという。

ここで上記の「地上へ降りる」ことについて、改めて確認しておきたい。というのも、これがその直近で発表されていたミウォシュの論考「地上へ降りること」[Zejście na ziemię]¹⁹⁾にて追求されたテーマであり、この時期の彼の思想を押さえる上で重要だと考えられるためである。

小論「地上へ降りること」は「現代詩」が陥っている窮状を指摘し、理想とされる詩のあり方を詩人たちへ訴えるという趣旨の文章である。ミウォシュ曰く、現代詩人は自らの個人的な経験や個性を軽んじ、形式に拘った「純粋な詩」を創作することも少なくない。だが詩人が自らの個を顧みない(自己を卑下する)ことは、同じくそれぞれに個性を有するはずの民衆の存在をも等閑にすることを意味する。先に見たような「新しい詩」をミウォシュが肯定するはずもなく、彼は最後に詩人たちへ次のように呼び掛けている。

人間への愛の秘密は、自己を卑下することではなく、自らの個性を発展させる力、そして、行き会うすべての通行人の中に [自らの個性と] 同じくらい重要で、似ているようで、異なっている —— なぜならそれには永遠に広がるその人自らの課題と唯一のしかるべき試練の小径が与えられているのだから —— という個性を見つけ出す技術にこそある。(Miłosz 2003 : 224-225)

彼はそれぞれに個性(感情やビジョン)を有する他者へ「人間への愛」を持ち、自身だけでなく彼らひとりひとりの個性にも訴える作品を書くよう詩人たちに投げかける。ここにおいて、ミウォシュが「地上へ降りる」という宗教的なメタファーを用いたのも、「純粋な詩」が生まれる天から人間のいる地上への(垂直)移動と、「純粋な詩」とは対照的に他者(世界)と繋がるのが必然とされる宗教的な要素に希望を見ていたためだということが明らかだろう²⁰⁾。

再び「今日の「詩」の嘘」へ話を戻そう。フリーデが提言した「純粋な詩」にあつて、詩人たちは上に見た「地上へ降りる」ことを放棄している。換言すれば、その詩には詩人の個性も「人間への愛」も見られず、それ故にミウォシュは認められないのだと述べる²¹⁾。

こうした主張を理由として、ミウォシュが「新しい詩」を決して理想とせず、創作するはずもないということは説明されており、フリーデへの反論は一応果たされたといえる。しかしながらこの小論の興味深いことには、他方で彼が詩人自らの感情やヴィジョンをそのまま描き出した作品をも良しとしないと宣言するのである。

詩というものは、それが私の感情的な状態やヴィジョンを捉えるだけでなく、そのヴィジョンが私の内面的な発展を説明していると言える場合にのみ意味を持つ。内面的な発展とは結局のところ、単なる叙情的な波の満ち引きのようなものだけでなく、論理的な判断や「世界観」と呼ばれるものの発展でもあるからだ。(……) [だからこそ] 作家というのは批評家が作品の仮面の向こうに隠された精神的な歴史にまで踏み込むことができることを望むものだとは私は主張したい。(Miłosz 2003 : 237-238)

ミウォシュが理想とする詩では、厳密に言えば、現実の「私」(詩人)＝詩中の「私」とはならない。なぜならば、現実の「私」が供する素材(叙情的な波の満ち引き)を、詩人は論理的かつ俯瞰的に「判断」した上で表現するものだからだ。そして

個性に「仮面」を被らせるというこの過程にこそ詩の「忘れられた意義」はあるとし、現代詩人たちは「その詩が自身や世界との戦いにおいて、一人でも誰かの助けになるかどうか」を強く問うべきだと呼びかけて、彼はこの小論を終えている。

先述の通り、ミウォシュの論考は当時彼がポーランドを代表する詩人であったことから、フリーデに劣らないほどの反応を呼び起こした。だが皮肉なことに、彼への反応が盛んであったが故に、論点は四散し、議論は詩人の予期せぬ終わりを迎えてしまう。

1.3. 噛み合わない議論の幕切れ

ミウォシュの論考「今日の「詩」の嘘」に対し、様々な批評家が反応したものの、フリーデの小論と同様に、多くは批判的なものだった²²⁾。とはいえ、ミウォシュの小論に寄せられた論駁を類型化して分析を試みた Antoniuk (2023: 58-66) が指摘するように、詩人の批判する「純粋な詩」の定義が明確には示されていないという指摘以外に、論考の趣旨から見て本質的とは言えないものが大半であった²³⁾。事実、文芸批評家のグルヂィンスキ (Grudziński, 1919-2000) もミウォシュの論考へ反論を試みた一人であるが、その一方で論争自体をシニカルに概観し、こう記している。

正直に言おう。「今日の叙情詩への旅」[「今日の「詩」の嘘」をめぐる論争]は、ミウォシュの恩恵に与ってその旅へ参加した「文学的地理学者」たちに、今日の詩の正確な地図も、その輝きと貧しさの、高揚と墮落の地図も描かせることは出来なかった。それが出来たことと言えばせいぜい、最も遠いところに新しい詩の輪郭の幻想のようなものを与えるいくつかの境界点となる杭を打ち込むことばかりだった²⁴⁾。

1938年の時点でグルヂィンスキはすでに、現代詩人や批評家に向けてミウォシュの企図した詩の「忘れられた意義」の再興という試みが頓挫していることを悟っている。そしてミウォシュ自身も当然、自らの反論及び提言が意図した形では受

け止められなかったことを認識していた。それ故に、彼は同年10月に小論「認められざるものたちの擁護」[Obrona rzeczy nieuznanych]²⁵⁾を発表し、「宗教的感覚が退化した人間」——「人間への愛」を重視しない「純粋な詩」の担い手——や「社会的正義感を持たない人間」——詩の「忘れられた意義」を見出せない批評家——に向けて、念を押すかのようにいま一度自らの考えを述べ、この論争から退いたのだった。

さてここで、上記の「純粋な詩」論争を最初から振り返ってみたい。論争の始まりとなったのはフリーデが「純粋な詩」を擁護するために発表した記事「二つの世代」だった。彼はその中で、理想的な「純粋な詩」(新しい詩)を創作する「若い世代」の一人としてミウォシュの名を挙げた。だがミウォシュはキャリア始めの時期から一貫して「純粋な詩」に否定的であり、また当時詩壇を代表する詩人でもあったことから、フリーデに回答する必要があった。そして彼は記事「今日の「詩」の嘘」を発表し、フリーデへの反論として「純粋な詩」の詩人には「宗教的な感覚」(人間への愛)が見られないことを指摘する。さらに詩とは詩人の感情的な状態やヴィジョンへ「仮面」を被らせて、自身だけでなく他者の「世界との戦い」においても助けとなるようなものとして存在すべきだという「忘れられた意義」を説いた。しかしながらミウォシュのこの提言は、同時代の詩人や批評家たちへ彼の意図した通りには届かず、論争は噛み合わないまま終結してしまった。

ミウォシュが論考で発したメッセージとは、ポーランドにおける「純粋な詩」論争の歴史から眺めると、確かに、詩は「道徳的あるいは市民的な義務が課せられるべき」であるという従来の考えに与するものであったことは否めない。しかし視点を変え、ミウォシュの創作活動においてはその重要性が看過できないのは、先述の通り、1936年の「転換点」までに彼が「社会運動や独立運動に奉仕する詩」の創作に積極的でなかったためである。そうであれば、散文(小論)では彼の詩学における変化が読み取られるのに対し、論争で等閑視された彼の詩それ自体には果たしてどのような変化が見られるだろうか。

次章からは、論争当時彼が執筆した詩を数編取り上げ、そこに見出される特徴および論争との繋がりを確認する。

2. 詩人の責務をめぐって

2.1. 「私たち」の運命を受け入れるということ
繰り返し述べてきたように、小論においてミウォシュは意気軒昂に詩の「忘れられた意義」の再興、すなわち「誰かの助け」となるような詩の創作を呼びかけていた。だがそうした勢いは、小論を発表した頃にはすでに醸成されていたというわけではなかった。

前章で紹介した小論「地上へ降りること」をミウォシュが発表したのは1938年6月のことだが、それに先立つ同年1月²⁶⁾、彼は詩「受肉」[Wcielenie]を発表する。小論と詩の繋がりはタイトルから容易に見て取れ、事実、執筆された時期も1937年の後半と重なっている²⁷⁾。そして第1, 2連がまさに「私は地上へ降りる」(schodzę na ziemię)という言葉で始まるこの詩には、「私」が人々を救うために「旅人」として墮落した地上をさすらいの様子が描かれる。以下は詩の最後の箇所、地上を彷徨った末に「私」が告白する。

私は叫びに應えない。いったい何ができるだろう、／私には始まりも目標もわからない。絶え間ない叫び、「救い主よ、／私たちの手から真実の代償をお受け取りください。／(……)／どうかご承諾ください。あなたは高く腕を広げられ、／王冠を戴かれて、どんな聖者たちよりも聖なる存在になるでしょう。」
／
(……)／わが天よ！私は深淵の上へと舞い上がろう／その奥深くでは小さくなった路面電車が走り過ぎ／真鍮のトランペットの音楽が祝日に鳴り響くような深淵の上へ、／酒場や浴場が喧騒に溢れる深淵の上へと、
慈悲という不正義の力に縛られている、／私は彼らとともにあり、彼らは毎日私を引きずる。／偽りの信仰、作りものの神々に私は仕えている。／

天から父なる神の囁きが召喚するのむなし
い、／刺し貫かれた手の跡を私が見せようとも、
／蒼天の中で私たちがみな滅んでしまう前に²⁸⁾。(Miłosz 2018: 111-112)

一見すれば、ここで「私」は自らの無力さを痛感し、地上（深淵）の人々から向けられる「絶え間ない叫び」に應えることなく、「救い主」としての役割からも逃避しようとするかのようなのである。確かに「私」は、天（深淵の上）へ帰ろうとする自らを地上に繋ぎとめるのは民衆に対する「慈悲という不正義の力」、すなわち空虚な義務感でしかないとも訴えている²⁹⁾。それ故に、最後には「滅び」の運命も甘受されたものと解釈することが可能である³⁰⁾。だが注意したいのは、そうした運命の担い手がもはや「私」でなく「私たち」であるという点だ。ミウォシュがこの詩で訴えるのは、人々と神がもはや「真実の代償」(祈り)で繋がりが得ないこと、従来の信仰(宗教)では「彼ら」も「私」も救い(慈悲)を望めないこと(偽りの信仰、作りものの神々)なのである³¹⁾。そして「私」は神への信仰があり得ない地上を生きる「人間」として、「みな滅んでしまう」という「私たち」の運命を受け入れようとするものと読むべきだろう³²⁾。とはいえ、この時期のミウォシュ作品における「私」は、ただ「私たち」の運命を受け入れるだけでなく、そこから行動に出ようと奮起していることも見落とせない。

2.2. 詩を書くということ

1938年初旬、ミウォシュは詩「ディテュランボス」[Dytyramb]を発表する。タイトルの「ディテュランボス」とはもともと古代ギリシアの豊穡神ディオニュソスを称える賛歌を意味するが、その名の通り、この詩の始めでは朝の海辺の景色や日中の長閑さといった自然の豊穡さが歌われる。しかしそこから今度は、そうした美しいものを詩で表現する行為そのものへと主題は変わり、第4, 5連は以下のように続く。

④悲しみという経験をした愛が私たちを／世界と繋ぐときには、／唐突に沈黙の堰が開いて、

／騒めき、羽音、色彩の歌が私たちの中で語りかけ、／空から、木々から私たちは予言を読み取り、突然に／自らの告白のために私たちの唇を求めるものがどう語られるべきか、見えてくるものだ。＼

- ⑤純粋な言葉が必要だ、生きてきた日や夜の想い出の／かすかな痕跡でさえもそれを汚さないように、／なぜなら幾週間、幾カ月、そして幾年も、知恵の痛みも、／木を木だと、人を人だと、星を星だと言うことを学ぶために、／新しい土地を蘇らせる神の形体のように／恐怖の蒸気からその土地を導き出すために存在しているのだから。(Miłosz 2018 : 115)

引用部では三つのテーマが交錯していることに留意したい。それは「愛」が「人間」や空、木々のある「世界」と「私たち」を繋いでくれること、「世界」と繋がった刹那に自らのうちへ浮かんでくるもの（予言）は「純粋な言葉」で告白されねばならないこと、そして「純粋な言葉」で語るのは「神」に代わって「新しい土地を蘇らせる」ためであることだ。ここで注意を要するのは、ミウオシュが「言葉」に課する「純粋さ」とフリーデが理想とした「純粋さ」の違いである。フリーデにとっての「純粋な」状態とは、詩人の経験される現実が指向されることなく、むしろ形式それ自体に韜晦する形で表象されないものだった。他方ミウオシュの「純粋な」状態では、逆に詩人の経験的現実（読み取られた予言）は表象されることを企図しており、それを攪乱する要素——たとえば形式主義——から自由であることを意味する³³⁾。詩の言葉が「生きてきた日や夜の想い出のかすかな痕跡」をも留めることを禁じられるのは、それがただ事物の本質（木を木だと、人を人だと、星を星だと言うこと）を明らかにするために存在するものだからである³⁴⁾。したがってミウオシュはフリーデとの論争で問われた「純粋さ」の概念を反転させることにより、「愛」で繋がれた現実（世界）に対して詩が果たさねばならない機能——「恐怖」の蒸気の下に隠れてしまった本質、すなわち「新しい土地」を「導き出す」こと——を強く訴えている³⁵⁾。換言すれば、

「純粋な言葉」の発話による世界の救済という、神が本来果たすはずの役割を³⁶⁾、彼は神から譲り受け、地上にいる「私たち」の一人である（作中の）詩人へと与えるのだ³⁷⁾。

信仰なき地上における詩人のこうした決意表明は、決して大衆や批評家の目を気にして取り繕ったものではない。なぜなら彼が「兄」として慕う詩人のヤロスワフ・イヴァシュキエヴィチ（Jarosław Iwaszkiewicz, 1894-1980）の誕生日（2月20日）を記念して個人的に送った詩「1938年2月20日」[20 lutego 1938 roku] は、次のような内容となっているためである³⁸⁾。

- ①火はすでに静まって春のすすり泣きが／戦いの塵を洗い流された清らかな地上に昇る時、／感謝の賛歌が鳴り響き、畑のライ麦が／神の恵み、愛の歓迎のようになる時、＼
- ②その時には、ヤロスワフよ、栄誉の君主がやって来て／死者の書の上にその賢明な額を寄せて、／そして問うだろう——彼が問うのはこれだけ—— 私たちが信じたかどうか／より偉大な真実、これほど寛大なこの土地の神聖さを。＼
(……)
- ④だからもし私たちのなかに真の時間への、／超自然的な借り受けの力への、予見という天賦の才への信仰があるならば／私たちはまた生命の水による洗礼者かもしれない／御子がやって来て、私たちの目から覆いを剥ぎ取ってくれるために。(Miłosz 2018 : 119)

第1, 2連で展開されるのは「私」による、カタストロフが終わった未来（真の時間）の空想である。特に第1連には「戦いの塵」も残さない「清らかな地上」の光景が描かれており、これは「私たち」詩人の「予見という天賦の才」が発揮されたものといえる³⁹⁾。そして重要なのは、「栄誉の君主」（キリスト）がやって来て「死者の書」を紐解くのだが、それは「戦い」の後のことであるという点だ。つまり「戦い」の中から「清らかな地上」を導き出したのはキリストでなく、「超自然的な借り受けの力」を有する「私たち」によ

るものといえる。ここにおいてその「超自然的な借り受け」の謂いも、神の「新しい土地を蘇らせる」役割を「私たち」が引き受けたという意味であることは明らかであり、かつそれは「より偉大な真実、これほど寛大なこの土地の神聖さ」をただ「信じた」こと以上に行動的なものである。したがって、第4連で「私たち」が「また」洗礼者かもしれないと想起されるのは、キリストと邂逅する前の洗礼者ヨハネのように⁴⁰⁾、地上においてキリストや神の不在を埋めるべく行為せねばならないという詩人の運命を強調する意図によるものと解釈されるだろう。結局のところ、プライベートで書かれたこの詩においてもミウォシュは、「予見という天賦の才」を発揮し、地上において神やキリストに代わり「真の時間」を救済し、「清らかな地上」を蘇らせることこそ、（直接には書かれないが）「戦い」にいま巻き込まれようとする「人間」に対する詩人（私たち）の役割ではないかと提起していたのだった。

本章でこれまで見てきたいくつかの詩の分析を通じて明らかとなったのは、詩中の「私」は地上で神（偉大な真実）の存在を信じて祈るという宗教的行為に限界を見ており、破局がもはや必至である運命を「私たち」（地上の人間たち）と共有しようとする一方で、恐怖に覆われた地上から「純粋な言葉」によって「新しい土地」を新たに導き出すという役割を神から借り受け、「私たち」に対する詩人の責務として引き受けるに至ったという事実である。

1938年にワルシャワで書かれたある詩の中では「広大な水面、霧のかかった首都／空には燃え上がる、戦争の凍てつくしるし」（Miłosz 2018: 168）とこれまでになく直截的な表現が選ばれるほどに事態が切迫している中、「転換点」を迎えたミウォシュの詩作に対する姿勢もやはり大きく変貌せざるを得なかった。神性が地上には存在しないその時、否、存在しないからこそ、詩人は意識的にその役割を担い、「私たち」を救うために創作へ踏み出そうとしていたと総括することが出来るだろう。

結 語

本稿では前半（第1章）にミウォシュが巻き込まれた論争として、フリーデとミウォシュの小論を確認した。論考にてミウォシュは、個人の経験的現実が「純粋たる詩的体験」に代えられる「新しい詩」を創作する「若い世代」の詩人として自らを名指したフリーデに対し、「純粋な詩」には「人間への愛」が欠如していると反論し、あるべき詩とは「自身や世界との戦いにおいて、一人でも誰かの助けになる」ものだと言明していた。次いで本稿の後半（第2章）では、こうした提言がどのような特徴を伴って彼の作品に顕現するかを確認した。前章の最後に総括した通り、論争と同時期に書かれた詩では、一方で運命共同体である「私たち」（地上の人間たち）と繋がりようとする志向が見られながら、他方カタストロフが予感される中で詩を書くことは本来の「世界」を取り戻して「私たち」を「恐怖」から救い出すことであるという信念の下、事物の本質を捉えるために必要である「純粋な言葉」を用いる詩人としての役割を、神に代わって引き受けようとする意志も見られた。とりわけ後者は1936年の「転換点」を迎えるより前には見られなかった大きな変化であり、また論考で自ら問うていた詩の「忘れられた意義」をまさに追求するものであったとも言えよう。

従来の「純粋な詩」論争が「（詩は）それ自体が目的であるべきか」それとも「道徳的あるいは市民的な義務が課せられるべきか」という二極を迫るものであった時、結局のところミウォシュが選び取った詩も後者のものとして回収されてしまうのだろうか。本稿でも繰り返してきたように、確かにそうした主張を否定することは出来ない。だがこれはいわば時局が詩人に促した理想の姿なのであり⁴¹⁾、詩人の実感がそれとは別のところに存していたことは最後に強調すべきだろう。ドイツによるポーランド侵攻までいよいよ秒読みに入っていた1939年4月に発表された小論「喜びと詩」[Radość i poezja] から一部を引用したい。

詩は内的生活の規律である。人間の道徳的

な営みと最も強く結びついた内的状態から生まれる。私たちは、自らを修練すれば美徳のハビトゥスを手に入れられるという可能性を信じている。(……) ある種の感動を非難することも、ある種の感情を区別することもできず、あらゆる自分の感情を紙上へ注ごうとする抒情的な部族には背を向けて、私たちは彼らとの類縁関係を断っているが、ほかに私たちと交わらないだろうものといえ、いわゆる形式的な緊張という戒律に則って言葉と文章を選択することにその規律が限定されているというような詩人たちもそうだ。(Miłosz 2003 : 275)

引用部で彼は「純粋な詩」と「ある種の感動／感情」(叙情的な波の満ち引き)をそのまま表現することを否定するのだが、かといって「道徳的あるいは市民的な義務」を果たす詩を理想として明示することもしない。その代わりに「詩は内的生活の規律」だと宣言している。彼にとって重要であったのは、時代が自らに課した義務を果たすという結果／大義以上にやはり、そこに至るまでのプロセス、つまり自らの置かれた立場や感情を俯瞰し(論理的な判断)、どうすればそこから「誰かの助け」になれるか——自らの告白のために私たちの唇を求めるものがどう語られるべきか——を追求する(美徳のハビトゥス)、まさに内的自由だったと言えるのではないか⁴²⁾。

畢竟するに、戦争前夜に彼の書いたものが「内的生活の規律」から生まれる詩であったと見ることは、従来の「純粋な詩」論争でしばしば見落とされてきた詩人の内面性——当時のミウォシュの言葉を借りれば、「作品の仮面の向こうに隠された精神的な歴史」——へいま一度目を向けさせるという点で、大きな意味を有するだろう。そしてミウォシュ研究という文脈において考えるならば、「内的生活の規律」から生まれる詩こそが、これまであまり取り上げられなかった、彼の戦争前夜に書かれた詩作品と論考との具体的な「繋がり」の上に存するものであるといえるはずだ。すなわち、それは論争によって提示される二極のいずれをも首肯できなかった詩人が見出した、義務

を単に果たすばかりの目的には収斂しない第三極的な希望だったのであり、ひとりの「人間」(個)がいよいよ戦争の予感される「世界」で「私たち」(地上の人間たち)のために立ち上がろうとする覚悟の現れでもあった。否、「繋がり」とはそればかりでない。その詩の淵源にある個へのこだわりが一筋の糸となって、そこからナチス占領下での創作活動をまで貫くとき⁴³⁾、「内的生活の規律」から生まれる詩とは、二つの時期——両大戦間期(大戦前夜)とナチス占領期(大戦中)——における彼の創作活動がまさに繋がる点の上に存在していたと考えることも、同時に、ミウォシュというテーマについて思考する上で大きな意義を持つのではないだろうか。

注

- 1) 詳細は、「純粋な詩」の淵源をエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) に求め、時間を経てフランスの象徴主義へ派生し、やがて 1920 年代のポーランド・モダニズムにまで及んだと考察する Ostasz (2017) を参照のこと。
- 2) 以下、引用における訳は特別な断りがない限りすべて筆者による。また引用中の [] は筆者による補足を指し、下線強調も断りがない限りすべて引用した筆者によるものである。
- 3) 詳細は拙稿 (2024) を参照のこと。またミウォシュはこの当時、詩人の職務とは「社会的な観点から近い将来に必要なとなるようなタイプの人間を育成する」(Miłosz 2003 : 33) ことだと記している。
- 4) 「純粋な詩」の否定は生涯に亘ってミウォシュの中にあり続けたものであり、21 世紀に入って発表した文章には以下の言葉を確認することも出来る。
「自らの世紀において私は恐怖の光景の証人であったから、フランス象徴主義の継承者たちが勧めていたように、そこから「純粋な詩」の領域へ逃れるということも私にはできなかった。確かに、私たちの時代の非人間性に対する怒りの反応が、永続的な芸術的価値を持つテキストのなかに表現されるということはほとんどなかった。たとえ私の詩のいくつかがその証しとして残っているととしても、である。」(Miłosz 2018 : 5)
- 5) 詳細は拙稿 (2025) も参照のこと。
- 6) ミウォシュ自身、『三つの冬』を発表した 1936 年がターニングポイントとなって、そこから自らの詩作について色々と模索していたことを認めており、後年のあるインタビューでは以下のような言葉を残している。

「いずれにせよ、私の職業人生にはいわば好き

に出来ない時期があります。それは『三つの冬』の後で1943年頃まで続く時期です。好きに出来ないのです。そこには模索の時期があるように思います。[どのような詩を書くべきかということ]をやみくもに探して、あちらこちらで試してみても、結局のところ根底には大きな不確実性があり、自分が本当に何をしたいのか分からないのです。」(Gorczyńska 2002: 54)

- 7) とはいえ、注意せねばならないのは、当時のミウォシュの作品にはグノーシス思想(マニ教)からの影響が見られることである。グノーシス思想ではカストロフが繰り返されることによって万物が完全な状態へと回帰する(アボカタスタシス)と考えられていた。つまり破局は最後に来る恩寵のための「進歩的な段階」だった。したがって詩中の「私」が「人間」の運命を受け入れたことは単なる受動的な行為でなく、恩寵を待ち望むという意図に裏打ちされたポジティブなものである可能性もあったと言える。
- 8) 1942年、ミウォシュはアンソロジー『独立の歌』[*Pieśń niepodległa*]を編纂し地下出版する。編者として彼は戦争前夜の時期を振り返り、次のような文章を記しているが、詩が同時代の雰囲気や民衆の存在を受けて変容せざるを得なかったことを読み取れよう。
「地下の震えがヨーロッパを駆け抜け、空気は重く、差し迫った大惨事の稲妻によって揺さぶられていたあの数年間、ポーランドの詩は、その最も優れた代表者の口を通して戦いと苦しみに満ちた未来を予言していた。(……)詩は集団生活の雰囲気から生まれ、まだ明らかになっていない集団の感情の状態を写し取る。(……)すべての人の心が感じていた不安、避けがたい試練に直面した内なる震えは、詩人の口以外に表現の手段を持たなかった。」(Miłosz 1981: 13-14)
- 9) 論争に参加した批評家たちが後年回顧することはあっても、それ以外の研究者でこの論争を取り上げる者は少なかった。研究者のAntoniuk (2023: 15-16)によれば、これまでに取り上げたのはフリーデの研究者か、両大戦間期におけるモダニズムやアヴァンギャルドの研究者に限られ、いずれもフリーデとミウォシュの論考を軸として繰り広げられた(複雑な)やり取りの全容を俯瞰できていなかったとしている。
- 10) 管見の限り、ミウォシュ研究においてこの論争に言及するのはZaleski (1981), Zieniewicz (1987), Kaźmierczyk (2012), Antoniuk (2015)などがあるに留まるが、いずれもやはり詩の例証が示されない、あるいは詩との連関には言及されない。またミウォシュは本稿でも取り上げている詩「ディテュランボス」を含め、1936年～1939年頃の作品をナチス占領下でまとめ、『詩集』[*Wiersze*]として地下出版する。だがポーランド語で彼の作品を論じた研究を紹介する資料には、この『詩集』に関する先行研究が

わずか6本しか記載されていない。第二詩集では95本の研究が紹介されていたことと比べれば、戦争前夜の作品を取り扱う研究の少なさは明らかである(Miłosz 2020: 202-203)。これはポーランド語の研究に限った話でなく、例えば第2章でも見るように、この時期の彼の詩には宗教(キリスト教)との関係が重要なテーマであるはずだが、膨大なミウォシュ作品に見られるカトリックからの影響を英語で体系的に論じたRosman (2014)でも1936年～1939年の作品は検討されていない。同様に英語で書かれたミウォシュ研究の入門書といえるNathan, Quinn (1991)も、『三つの冬』所収の作品に言及した後はナチス占領期の創作へと話題が移っている。

- 11) 1938年4-6月発刊の隔月刊誌『ビューロ』[*Pióro*]創刊号に掲載され、巻頭を飾っている。なお『ビューロ』は「反自然主義」や「純粋な詩」の理想に触発されて、詩人のチェホーヴィチ(Józef Czechowicz, 1903-1939)が刊行し始めたものであり、フリーデも創刊時から大いに関与していた。本稿では触れないが、フリーデが「純粋な詩」を論じた背景にはこうした『ビューロ』の創刊という事実もあった。この点についてはAntoniuk (2023: 20)も参照のこと。ちなみにこの後に紹介するミウォシュの小論「地上へ降りること」も、上記の『ビューロ』創刊号に掲載されている。こうした事実からは、あくまでフリーデらにとって、ミウォシュも「純粋な詩」の理想を同じくする詩人であると考えられていたことが伺われるだろう。
- 12) 本文中の引用はFryde (1938: 6)からである。
- 13) ミウォシュの他にもチェホーヴィチやJerzy Zagórski (1907-1984), Anna Świrszczyńska (1909-1984)らの名前が挙げられている。
- 14) 文芸批評家のKwiatkowski (2012: 483)は両大戦間期の文学を概観する浩瀚な書籍の中で、フリーデの論考は「批評家たちがすでに指摘していたように、説得力を欠いていた。名指された詩人たちはそれを認めなかった。他方でその記事[二つの世代]は状況の客観的評価としても、概ね厳しい批判にさらされた」と説明している。
- 15) 本稿における参照および引用はAntoniuk (2015: 51)による。
- 16) ヴィカの他にも、ミウォシュたちは「新しい詩」の創作者ではないと反論した批評家として、Ignacy Fik (1904-1942)やMiroslaw Starost (1910-1961)がいた(Antoniuk 2015: 51-53)。また文学史家のBialek (1962: 122)も1960年代に入って同様の指摘をしている。
- 17) 1938年7月発刊の隔週刊誌『骨の折れる仕事』[*Orka na Ugorze*]に掲載された。
- 18) この論考の他の箇所にもフリーデや彼を支持する人々への反論を見取ることが出来る。たとえば以下の部分が挙げられる。
「あなたたちはスコラ哲学的[マリタンの暗示]な「道具と手段」の原則を参考とし、職人仕事の原則を引っ張り出す。あなたたちは言う

- 作品のみが私たちと関わりがある、作品だけ、芸術家ではないと。」(Miłosz 2003: 235)
- 19) 1938 年 4-6 月発刊の隔月刊誌『ピューロ』[Pióro] 創刊号に掲載された。
 - 20) 宗教的なモチーフはミウォシュのデビュー作から一貫して登場し、いずれも集団と繋がる契機として存在する。特に第一詩集ではポーランド・カトリックが個人主義を許さないものとして露悪的に描かれる。また同詩集でも重要な要素として「世界への愛」が登場するが、それは本稿で取り上げる「人間への愛」と似て非なるものである。前者の愛は現在および未来の人々(被造物)という集合体へ向けられるもので、彼らと連帯して新たな「集団」を形成しようとする「社会主義的な」プログラムに基づいている。他方後者の愛は、自らが「人間」であると強く意識する「私」から地上の民衆ひとりひとりへ抱かれるもので、個の価値は集団(私たち)に対し減ぜられず、むしろ補完し合う。詳細は拙稿(2024)も参照のこと。
 - 21) 1939 年 8 月 14 日、ワルシャワを離れて一時的に田舎を訪れていたミウォシュは、友人のイヴァシキエーヴィチ宛てた手紙の中で地元の人々との交流を愉快に綴りながら、「正直に言って、最近人間の諸事へ途方もなく興味を持つようになり、人々についての話を聞いたり、人々を観察したりすることが私にとって大きな喜びとなっています」(Miłosz, Iwaszkiewicz 2011: 117)と記している。こうした記述からは、彼にとって「地上へ降り」て民衆とともにあること(人間への愛)が義務的なものではなく、破局(戦争)が意識される日々の中で大きな支えとなっていたことも伺われるだろう。
 - 22) ミウォシュの論考に対して批判的な反応が多かったであろうことを物語る一つの例として、「今日の「詩」の嘘」の冒頭には雑誌編集部から以下の注釈が添えられている。
「『三つの冬』の作者であり、偉大な詩人のチェスワフ・ミウォシュがコメントを寄せてくれたため、ぜひとも掲載させていただくこととした。ただし掲載にあたっては、誤解を避けるため、ミウォシュ氏の表明したいかなる意見にも私たちは同意しないことを明記しておく。」(Miłosz 2003: 233)
 - 23) たとえば当時著名な批評家のフィクは、ミウォシュがメタファーとして用いた「地上へ降りる」ことを取り上げ、それが「ロマン主義者たちの信念の焼き直し」に他ならないと切り捨てている。またミウォシュの形式主義批判に関しても、形式主義とは本来「創作行為の理論ではなく、完成した作品を論じる方法」であるが、彼はそれを理解していないと批判する。いずれの点も、ミウォシュが主題としていた詩の「忘れられた意義」に関わる本質的なポイントとは言い難い(Fik 1938: 2-3)。
 - 24) 原典は Herling-Grudziński (1938: 6) だが、本稿における参照および引用は Antoniuk (2023: 244) による。
 - 25) 1938 年 10 月発刊の日報『ヴィルノ日報』[Kurier Wileński] に掲載された。
 - 26) 1938 年 1 月発刊の週刊誌『ピオン』[Pion] 3 号に掲載された。
 - 27) Baranowska (2001: 193) も同様の指摘をしている。また Fiut (1978: 85) や Gorczyńska (2002: 241) はこの詩が小論の「詩的応答」であると述べている。
 - 28) 以下、詩の引用中の／は改行を、＼は改連を指す。また行頭に数字がある場合は連番号を意味する。
 - 29) Kraszewski (2012: 24-26) も同様に、この詩の「私」には危機に見舞われた人々を救おうという意思が見られず、「静かに、誰にも気づかれない[現実の]観察者」として存在しているとも考察する。
 - 30) Bill (2021: 35) は上の引用部について、「垂直的な超越の呼びかけが、地上の身体として象徴的な磔刑に処されたのち死が訪れるという現実を乗り越えられないままに、この詩はアンビバレントさと不安」を残して終えられると分析している。
 - 31) Kraszewski (2012: 26) は、この詩には「キリストが地上に本当に存在するようになるのは、現実の人々のキリストに似た行為によってのみであるという真理」が刻まれていると考察している。また他にも、1938 年に書かれた詩「支配者たちのように」[Jak władcy] には、「私」を恐れさせる「祈り」(秘密)の虚しさに触れて次のように記される。
「ああ私の白い像よ、私を恐れさせるものは時間ではない／春が過ぎ去ることも死の小川でもない。／私たちのこの知恵がもたらすあまりに早すぎる安らぎと／地上の楽園がすべて無意味だということなのだ。＼(……)＼祈禱の言葉をつぶやく子供たちのように、／あるいは黄ばんだ聖務日課書を唾で濡らす老人たちのように、／音を立てて岸に打ち寄せる波の上で／秘密が明かされないことを私たちは知っている。」(Miłosz 2018: 128-129)
 - 32) たとえば 1938 年に発表された詩「朝の門」[Brama poranku] (Miłosz 2018: 123) にも、「すべての人の中に生ける神のしるし」を見出せる「私」(救い主)が登場する。彼は「沈黙が無関心になるような沈黙の方法」や「恐れ」、「自分がそうありたいと思う存在ではないことの苦しさ」を知ると、そこから「兄弟愛」で結ばれる運命共同体(私たち)の中で生きてゆくことを決意するに至るが、この粗筋は詩「受肉」を彷彿とさせるものだろう。
 - 33) この点は、フリーデの小論とこの詩を比較している Antoniuk (2015: 151-152) の考察に気づかされるものであった。なお Antoniuk は「『二つの世代』は「非表象的表象」、すなわち善と美の名の下で世界に対する反抗としての表象の思想を表明するのに対し、「ディテュランボス」は神

義論の機能において、すなわち善と美の名の下で世界を救う表象として考える可能性を示唆している」と分析する。

- 34) フリーデが小論「二つの世代」で「新しい詩」の特徴として挙げた、新たな意味的・感情的価値を付与して「純粹たる詩的体験」を構築する「記号」としての「言葉」との対称性にも留意したい。
- 35) こうした詩の発話が世界の救済に繋がるという考えをミウォシュはナチス占領期にも持ち続けることとなる。たとえば 1942 年に編纂したアンソロジー『独立の歌』には以下のような言葉が確認される。
- 「詩の力と意義とはおそらく、これまで名も与えられてこなかった感情を表明すること、まずは現実という複雑に連れ合った茂みへ染み渡り、そして名もなき事柄に名を与えること、ここにこそあるだろう。」(Miłosz 1981: 13)
- 36) 「ヨハネの福音書」第 1 章冒頭を想起されたい。
- 37) ここでは「私たち」(のひとり)＝詩人となっているのだが、この点について、アンソロジー『独立の歌』にはミウォシュによる重要な記述が見られる。

「私たちは大きな歴史の変革の最中にあり、民族に能う限りでは最大の賭けをしていると知っている。この事実こそ、ポーランドのペンから生まれたあらゆるものへ早くも決定的な影響を及ぼしている。個々人の個人的な経験は背景に退き、というよりも純粹に個人的な経験などもはや存在しないのだ。個人のあらゆる喜びもあらゆる苦しみも、共通のより広い問題——「生きるべきか死ぬべきか」は第一に民族の存在に関わるものであり、個人の存在に関わるのではない——を反映したものである。このように戦争は同じ不幸によって何百万もの人々へ襲いかかる現象として、共同体というカテゴリーで思考することを教えるものなのだ。」(Miłosz 1981: 7-8)

「私たち」という運命共同体の一人であることを受け入れた詩人は、戦時になると共同体(何百万もの人々)というカテゴリーで思考し、詩作を行うようになることと記される。したがって、この詩においても明らかに詩人を対象とするものへ「私たち」という主体が用いられるのは、「大きな歴史の変革」(戦争)を目前にして、ミウォシュが既にそうしたカテゴリーで思考しつつあるという予兆のようなものとして解釈することが可能だろう。

- 38) 事実、この詩は 1985 年に至るまでの詩集にも収録されなかった。
- 39) 小論「今日の「詩」の嘘」には、「ヴィジョンとわずかの予言の才もなければ、詩人であると名乗ろうとしてはならない、他人の称号を盗み取ることになるからだ」(Miłosz 2003: 240)という言葉があったことも想起したい。
- 40) ヨハネは新約聖書に登場するユダヤの預言者で、ヨルダン川でイエスに洗礼を施したことから

「イエスの先駆者」とも呼ばれる。「マタイによる福音書」なども参照のこと。

- 41) 1939 年の開戦前後の時期を振り返って書かれたある詩には、「おそらく私は自惚れから書くことが出来たのだろう。／だがすべてにはあの予言的なとげがあった、／まるで夜じゅう燃える菓を／風が転がすように。」(Miłosz 2018: 170)という一節があり、自らの詩作は「自惚れ」が故に可能であったと振り返っている。
- 42) 詩「ディテュランボス」の以下の引用箇所について、文学者の Zach (2011: 85) は「「純粹な詩」とその内側に封印された個人主義へ対抗するものを求めて、ミウォシュは、周囲の世界のリズムに屈しながら、同時に内なる自由を表明する「喜びの詩」に目を向け」と指摘しており、非常に参考となる。
- 「計り知れない喜び。私たちには自由が必要だ、／思い悩まない自由が必要なのだ／自らの告白のために私たちの唇を求めるものがどう語られるべきかと」(Miłosz 2018: 115)
- 43) 終戦を迎えた 1945 年、ミウォシュは占領下で書いた詩を中心として詩集『救い』[Ocalenie]にまとめた。この詩集の「序文」にあたる詩には次のような言葉が見られる。
- 「民族や人々を救わない詩／それはいったい何だろうか／それは公式の嘘との共謀、／まもなく誰かに喉元を切り裂かれようという酔いどれたちの歌、／娘の部屋にある読み物、／私が書けもしないぐせに良い詩を望んだこと、／私が遅まきながら詩とは彼らを救うためのものだ」と悟ったこと、／それこそ、そしてそれだけが救いなのだ」(Miłosz 2018: 155)
- 引用はまさに、ミウォシュ(私)が占領下にあっても「民族や人々」のために、詩の「忘れられた意義」を追求し続けていたという事実を示唆するだろう。

参考文献

- Antoniuk, Mateusz (2015), *Słowo raz obudzone, Poezja Czesława Miłosza: próby czytania*, Kraków: Księgarnia Akademicka.
- (2023), *Miedzy „blaskiem duchowej prawdy” a „sprawami państwa współczesnego”. Spór o „czystą poezję” (1938/1939)*, Poznań: Wydawnictwo Poznańskiego Towarzystwa Przyjaciół Nauk.
- Baranowska, Małgorzata (2001), *Zejsście na ziemię, Teksty Drugie* 3-4, s. 190-197.
- Białek, Józef-Zbigniew (1962), *Ludwik Fryde jako krytyk literacki*, Warszawa: Państwowe Wydawn. Naukowe.
- Bill, Stanley (2021), *Czesław Miłosz's Faith in the Flesh: Body, Belief, and Human Identity*, New York: Oxford University Press.
- Fik, Ignacy (1938), Grzech anielstwa. Na przykładzie Czesława Miłosza, *Pion*, nr 36 (257), s. 2-3. 本稿での参照ならびに引用は Biblioteka Uniwersytecka KUL の Web サイト上のものを用いた。(<https://>

- dlibra.kul.pl/dlibra/docmetadata?showContent=true&id=68371) (最終閲覧日: 2025/03/10)
- Fiut, Aleksander (1978), Czy tylko katastrofizm?: o przedwojennej poezji Czesława Miłosza, *Pamiętnik Literacki: czasopismo kwartalne poświęcone historii i krytyce literatury polskiej* 69/3, s. 75–112.
- Fryde, Ludwik (1938), Dwa pokolenia, *Pióro* R. 1, nr 1, s. 3–12.
- Gorczyńska, Renata (2002), *Podróżny świata*, Kraków: Wydawnictwo Literackie.
- Herling-Grudziński, Gustaw (1938), Bilans i wnioski, *Orka na Ugorze*, nr 9. 本稿での参照並びに引用は Antoniuk (2015: 239–244) に収録されたものを用いた.
- Kaźmierczyk, Zbigniew (2012), Wcielenie – wczesny wiersz Miłosza. [w:] *Poznanie Miłosza* 3, Fiut, A (red.), Kraków: Wydawnictwo Literackie, s. 587–607.
- Kraszewski, Charles S. (2012), *Irresolute Heresiarch: Catholicism, Gnosticism and Paganism in the Poetry of Czesław Miłosz*, Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing.
- Królak, Tomasz (1989), „Czym jest poezja, która nie ocala...?” Poeta i poezja w wierszach Czesława Miłosza, *Roczniki Humanistyczne* Tom 37, zeszyt 1, s. 5–96.
- Kwiatkowski, Jerzy (2012), *Dwudziestolecie międzywojenne*, Warszawa: Wydawnictwo Naukowe PWN.
- Miłosz, Czesław (red) (1981), *Pieśń niepodległa*, Michigan: Michigan Slavic Publications.
- (1990), Przeciw poezji niezrozumiałej, *Teksty Drugie: teoria literatury, krytyka, interpretacja* nr 5–6, s. 151–162.
- (2003), *Przygody młodego umysłu*, Kraków: Znak.
- (2018), *Wiersze wszystkie*, Kraków: Znak.
- , Fiut, Aleksander (pod kierunkiem) (2020), *Bibliografia przedmiotowa 1932–2020 Wybór*, Kraków: Wydawnictwo Literackie.
- Miłosz, Czesław, Iwaszkiewicz, Jarosław / Toruńczyk, B., Papieski, R (red.) (2011), *Portret podwójny. Wykonany z listów, wierszy, zapisków intymnych, wywiadów i publikacji, wybór tekstów*, Warszawa: Zeszyty Literackie.
- Nathan, Leonard., Quinn, Arthur (1991), *The Poet's Work: An Introduction to Czesław Miłosz*, Cambridge: Harvard University Press.
- Ostasz, Gustaw (2017), Nad genealogią i meandrami istnienia „poezji czystej”, *Fraza*, nr 3–4 (97–98), s. 82–98. 本稿での参照ならびに引用は Uniwersytet Rzeszowski の Web サイト上のものを用いた. 引用の頁数も参照ファイルに準ずる. (<https://frazza.ur.edu.pl/wp-content/uploads/2023/05/gustaw-ostasz-2-nad-genealogi.pdf>) (最終閲覧日: 2025/07/06)
- Rosman, Artur Sebastian (2014), *The Catholic Imagination of Czesław Miłosz* (A dissertation submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy), University of Washington. 本稿での参照ならびに引用は Web 上に公開されているものを用いた. (https://digital.lib.washington.edu/researchworks/bitstream/handle/1773/26446/Rosman_washington_0250E_13384.pdf; sequence=1) (最終閲覧日: 2025/07/20)
- Zach, Joanna (2011), Whitman and Miłosz's America, *Przekładaniec. Between Miłosz and Miłosz* 25, s. 81–89.
- Zaleski, Marek (1981), O „grzechu anielstwa”, czyli historia pewnego nieporozumienia, *Teksty: teoria literatury, krytyka, interpretacja* nr 4–5 (58–59), s. 77–92.
- Zieniewicz, Andrzej (1987), *Idące Wilno. Szkice o Żagarach*, Warszawa: Państwowy Instytut Wydawniczy.
- 山本悠太朗 (2024) 「『凝固した時の詩』は失敗作だったのか —— チェスワフ・ミウオシュの第一詩集試論 ——」, 『Slavica Kiotoensia: 京都大学大学院文学研究科スラブ語学スラブ文学専修年報』4号, 167–201頁.
- (2025) 「なぜ「慎重な研究者」は蘇ったか —— チェスワフ・ミウオシュ『三つの冬』試論 ——」, 『Slavica Kiotoensia: 京都大学大学院文学研究科スラブ語学スラブ文学専修年報』5号, 2025年末刊行予定.

A Poetry Born of the “Discipline of Inner Life”: The Case of Czesław Miłosz on the Eve of World War II

Yutaro YAMAMOTO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary In 1938, on the eve of the war, the poet Czesław Miłosz became embroiled in the “pure poetry” controversy. While a critic described Miłosz as a poet of “pure poetry”, Miłosz himself argued that “pure poetry” lacked “love for humanity”, and suggested poetry should serve people in a cruel world. This paper examines what features of poetry, which he regarded as his ideal, he actually employed in his works, by analyzing several poems written around the same time as the controversy.

In his works, catastrophe is foreseen on Earth, and divine salvation is not expected. In such a situation, the “I” (the poet), united in love for “others” (human beings) living on Earth, stands up for “us” and takes action to rescue the world with the words of poetry.

Miłosz’s oeuvre could be said to fulfill a “moral or civic duty,” but he valued the poet’s inner world, from which the ideal poem is born. In this respect, one may conclude that what he pursued on the eve of the war was poetry born of the “discipline of inner life.”

Keywords: catastrophe, Poland, poetry, interwar period, pure poetry